

「季刊わたぼうし」 第27号

発行者:わたぼうし連絡会  
創刊号から 発行日:1992年(平成4年)7月1日 '92 夏号

第27号のテーマ 「障害者の結婚生活 II」

ふたりの旅にふるさとは無い  
互いが互いのふるさとだから  
ひとりひとりではない  
ふたりという名の天使  
ふたりという名のけもの  
ふたりという名の種子  
ここから荒野へと  
時に運ばれる種子

谷川 俊太郎作

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義、主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## テーマ《障害者の結婚生活 II》

今回も障害を持ちながらも、結婚生活をなさっている方々の体験談を寄せていただきました。

### 障害者同志の結婚

### 地域住民・主婦

私は夫とともに、そううつ病です。現在、二人とも51才です。結婚してから8ヶ月が経ちました。私は専業主婦として日々を送っています。昔、教員をしていたので、今、中学3年生の生徒さん一人の勉強を見えています。

夫は片道40分の所へ勤めていましたが、うつ病がどうしても治らず、ただ今、家でつまつまと、こまめに家の仕事をしています。

私たち二人は、身体のほうは何不自由ないのですが、そううつ病が長い間続いています。不眠症で薬なしでは眠れない夫、人の前では緊張して神経の使う細かい仕事が苦痛のようです。

二人の障害年金でなんとか生活しています。親、姉、弟に絶対に迷惑をかけないようにしています。入院中に知り合った数人の友だちと電話や手紙、実際にあったりして励ましあっています。

私たち夫婦は、ただひたすら、再入院しないように注意して、人に迷惑をかけないように努力しています。どんなにつらくても、やはり社会に生きるのが幸福だと身を持って知りました。

年老いた両親ともなるべく話し合いをし、心の交流を図っています。いろいろ辛いことがたくさんありました。でも、負けずにここまで頑張ってきました。これも皆、社会の御恩と思い、障害者だからといって甘えず、できるだけ社会に御恩返しをしようと、日々努力をしています。

謙虚に、勤勉に、人に優しさをモットーにしています。障害で苦しむ皆さん、誠実に一生懸命正直に頑張れば必ず道が開いてきます。一難去って、また、一難の人生ですが、歯を喰いしばって頑張りましょう。

私たち夫婦は、県の保健所の精神障害者の人たちの交流を図る「ひまわり会」にも入会しています。月に2回、料理を習ったり、いろいろな行事があり、楽しく有意義な活動をしています。今後も「ひまわり会」がある限り、出席して人生の糧としたいと思っています。下手ですが、自作の歌を一首書き添えます。

・花好きの 夫が買い来し アザリアを 食卓に置き 鍋囲みけり

社会の皆様、今後ともよろしくご指導お願いします。

## あたしの赤い糸

## 地域住民・主婦

「素敵な恋がしたい」小さい頃からの夢でした。でもそんな夢は、いつのまにか口にすることができなくなりました。私の心のなかの“バク”が夢を食べ始めてしまったのです。一生結婚できなくても生きていけるようにしよう、そう思っている会社に就職しました。初めての仕事で、毎日残業、残業……。でも、何時の頃からかそれが楽しみに変わっていききました。私を必要としてくれる人に気づいたのです。それもこれも残業のお陰です。それから半年後、私たちは結婚しました。

これが私のラブストーリーです。今では、妻の座にどっかりと居すわっています。

結婚は素敵なことだと思います。私の中の“バク”がいなくなることが多くなりました。たまに現れると旦那様が退治してくれます。一度しかない人生、泣いて、笑って、すねてあまえられる人がいたら、飛び込んでいく勇気も必要だと思います。

素敵な恋をした下さいね。ぐうたら主婦は今日も元気＝

## 私たちの結婚

## 地域住民・自由業

子供の頃、病院や施設に長く生活していた障害者は、私もそうですが、甘やかされて育っています。私の妻は結婚するまで一度も包丁を持ったことがなかったそうです。手が不自由でできない、というのではなく、危険だからと、親がさせなかったのです。この後の練習で、野菜を切ること、ジャガイモの皮むきも上手にできるようになりました。

その他の家事も、そのとおりでした。私も夫らしい手助けは何もできません。

スタートがその調子なので大変でした。同居の私の両親にも苦勞をかけました。当初、家事はすべて母まかせ。母がいなかったら、子供は育てられませんでした。そして、妻本人も随分苦勞したと思いますが、今では大分主婦らしくなってきました。

妻の成長に比べて、私の方が遅れているのかもしれない。障害が重くても、結婚して子供を作り、家庭を持つということは、社会に参加すること、父親としても、ぼんやりしては子供のためにマズイ。たとえ、できなくても、前向きに努力している姿だけは子供に見せたいと思っています。

とにかく、重度の障害者は誰かの手助けがなければ生活して行けません。親はいつまでもいてくれません。だから助け合う伴侶がいるということは一番の幸せです。もちろん、助け合うということだけでなく、悩みや喜び悲しみを共にできる幸せは、言うまでもありません。

私たち夫婦は二人プラスしても、まだ一人前にたりないのです。これからも協力してやっ行ってきたいと思っています。

喧嘩もよくしますが、仲は良い方です。この6月で結婚10年になります。

## 障害者と結婚生活を読んで

## 地域住民・肢体障害

私は24才の時、会社の帰りに交通事故で頭を打ち、そのとき以来、左半身麻痺の障害者となりました。始めは一生車いすか寝たきりと言われ、両親にショックを与えたようですが、今では何とか杖をついて歩けるようにまできました。

会社も辞め、当時好きだった人とも別れ、今は再就職に向け、リハビリに励む毎日です。当時は健常者と同じように、私も人並みに結婚に夢を抱き、来るべきその日の夢を見たりしたものでした。

けれども、一転して2年間という長い入院生活の中で考えたことは、もともと結婚とは好きな人のために何かをしてあげること、私の場合は一番好きな人に負担をかけたり、逆に苦勞をかけることに、結果的になってしまうでしょう。そうでなくても、「してあげたい」と思ったことが、できないと実感することが一番つらいと思います。それで、私の場合は結婚をあきらめることにしました。

人に言えば「気持ちさえあれば」とか「支えあって行けば」とかと、言うかもしれませんが、そんな頭の中での理想を言われても、私自身にしてみれば結婚は現実であり、生活なんであって、頭の中で考えた理想や希望だけでは済まないのです。

だから、健常者の頭の中で考えた理想や希望を押し付けられるより、当の障害者自身の体験談がどれだけ勇気づけられたり、自身につながるかわかりません。

それで「季刊わたぼうし」の26号を読んで私もやれるかも思ったりもしました。でも、私の場合の問題は、結婚を考える人との出会いの場がないということです。

## 砂漠に咲く花のように

## 地域住民・農業

「障害者の結婚生活」の特集を読ませていただきました。ご夫婦それぞれが障害がある中で、愛の絆によって結ばれ、日々励ましながら立派に生きておられる姿に感動させられるとともに、生きることの尊さを改めて教えられたような気がします。

一年中、緑が何ひとつないと思える広大な砂漠にも、あるわずかな時期には雨が降り、いっせいに草花が芽生え、あたり一面、美しい花を咲かせるのだそうです。砂漠に咲くその花は、ほかのどんな花にも比べようもなく、美しく、また力強いかと思えます。

障害があるなしだけではなく、苦しみや悲しみの中で人生を送らなければならない人もあります。苦しみや悲しみの中に身を沈め、環境の悪さや人のせいにしてしまえばそれまで。でも、そんな中でも、生きることに希望を見出し、力強く歩み始める時、その人は周りの人々に感動を与え、生きる勇気と希望を与えてくれます。

はた目に見れば、その人は、果てしない砂漠を一人歩いているようなものかも知れませんが、でも、その人の通った足跡には美しい花が咲いていることでしょう。だれにも咲かすことのできない美しい花が。

## 「障害者との結婚について」の座談会 地域住民・会社員

なぜ、このようなことを話し合ってみようか、と思ったかと言うと、単なる私の気まぐれでしたが、彼らにとっては死活問題だったと言えます。それがこの話し合いを私なりの終えた時の感想です。

### 今回の参加者

Iさん(脊損、車いす)

Kさん(先天性、車いす)

投稿者(レポート係)

### 目的

なぜ、障害者たちの結婚が難しいのか原因を考える。またその解決方法を考える。

### 結論

話し合った結果、いくつかの共通点がみられた。

- ・コミュニケーションの不和。
- ・将来的に不安(経済的に)
- ・相手に対する負担が大きい。
- ・補助具などの出費が多い。
- ・本人たち以外では、親たちの反対が強い。(障害の子供を持つ苦勞を知っているためなのか?)
- ・第三者の障害者に対する固定観念が根強い。(思いこみなど) ・世間体が気になる。これらを解決しない限り、本当の幸せな結婚は望めない。

### 考察

障害の程度にもよるが、現実の厳しさを感じた。また、障害者たちが、負い目を感じていたことを、改めて知らされた。

今回は、二人の障害者と話し合ったが、まだまだ問題点はあるはず、近いうちに他の人たちと話し合う機会を作っていきたい

余談ではあるが、家の改造には障害者が便利ではなく、家族全員が使えることが大事だと思う。障害者にとって多少不便であっても使えるように努力すべきだと思う。このことによって、外に出ても一般的な施設が使えることにつながると思うからです。

### 最後に

今回のレポートはあえて問題提出に止めた。皆さんの意見が聞きたいからです。これを読まれた皆さんどう思いますか?

## 福祉もの知り博士

### 脳性小児麻痺について I

読者の皆さん、コンニチハ。蒸し暑い梅雨の日々が続いているが、元気かな？

今回より数回にわたり、脳性小児麻痺について、解説を行う。まず、脳性小児麻痺の特徴としては、言語障害、アテトーゼ＝不随運動などがあげられる。

言語障害、言葉が健常者から聞きにくいということがあるが、サ行、チャ、チュ、チョ、シャ、シュ、ショなどの発音がしにくいし、しゃべりにくい、また、急がせた場合や体調が悪い場合などは、緊張して一層喋りにくくなり、聞いている方からはよけいに聞きにくくなる。

私たちの中では原則として、聞いている人がわかるまで根気よく何回でもしゃべることになっている。そのことによって、本人との意思疎通を図っていくことにしている。

しかし、障害者の中には一度言ってわかってもらえなかったら「もう、しゃべりたくない」といって口をつぐんでしまう人も多い。聞いている方でも言われることがわからないので、次回から、その人を避けるようになってしまう。

この問題というのは、基本的にもっとも大切な問題ではないか。コミュニケーションができない場合は、無視したりまたは排除してしまう傾向があると思う。私たち言語障害を持つ者の中にもわかりやすい人とわかりにくい人がおられる。

今回はこれで、ワシの講義を終わる。次回も、脳性小児麻痺について講義する。じゃ、皆さん暑い日々が続くが元気で。

解説：地域住民(脳性小児麻痺)

## 我が家のペット大集合

### ～ミーコ登場～

### 地域住民

はい、こんにちは。私は、ミーコよ。

私の名前は、ミーコ。またの名をアキコと呼ばれています。私は、もとの飼い主に捨てられて、今の家にやってきました。私は三毛猫の女、年はですって、女に聞くもんじゃないわ。

私は、きれいずきで、珍しいことをするんですよ。猫にまたたびというけれど、猫に石鹸、私は石鹸の匂いが好きで、特に、ボディシャンプーの匂いがたまらなくて、もだえてしまうのよ。だから、風呂上がりの人には、身体を擦り付けたりして気持ちいいにゃんなんてるのよ。

また、食べ物もこのみがあり、ぜいたくですぐにあきてしまうの。それでアパッチさんからは、アキコといわれます。本当は私は、ここ、アパッチさんの所では飼われないのですが、元の飼い主が、私をここに捨てたんです。ウラメシヤ、ニャン。

## 各地の行事に参加して

### 障害者の若人の集い

### 石川県身体障害者連合会

2月9日(日)、ホリディ・イン金沢で「障害者の若人の集い」が男35名、女12名が参加して開かれました。まず、参加者全員の自己紹介があり、続いてレクリエーションを行って参加者の緊張をほぐしました。

また、食事時間にはアルコールも少しはあって、カラオケなどを楽しんだ後、プレゼントの抽選をしました。最後に意中の人の名前とアンケートを書いて終了しました。

今回の集いは毎年1回は開かれています。女性の参加者が少なく、同じ人が何回も参加している状況です。女性がたくさん参加して、みんなで盛り上がるような楽しい企画がありましたら、ぜひ教えて下さい。

### ほほえみの仲間で「六翠苑」一泊旅行

4月11日に昨年の「ほほえみの石川大会」で知り合った仲間で、石川県障害者保養センター「六翠苑」で一泊してきました。参加者は現役の高校生から50代の方まで、老若男女合わせて、総勢23名。

18時半から1階の食堂にて、宴会を兼ねた夕食です。値段の割に立派な料理が並び、ビールで乾杯の後、初対面の方も多いため、自己紹介をしてから歓談です。

2次会は3階の会議室で、レクリエーションを全員で楽しみました。3つのグループに分かれて『これ、な-んだ?』と言って一人ずつ前に出て、目隠しをして手探りをして出された品物を当てるゲームです。2日目は能登島に渡って、能登島水族館とガラス工芸館の見学に行ってきました。

これからもこのような交流の場を持ちたい、と思っています。

## 「内灘アカシアジョギング」に参加して 地域住民・肢体障害

5月17日にアカシアジョギングという大会が行われ、初めて参加させてもらいました。この大会は、普通のジョギング大会とは違って、健常者も障害者も一緒に参加できるというものです。コースは3km、6km、9kmとあり、各自が事前に自分のタイムを申告して、実際のタイムとの差が少ない人から順位が決まるというルールでした。

私は6kmに参加したのですが、日頃の運動不足のせいか結構しんどいものがありました。スタートから緩い上り坂で、ここが結構きつく、その反対に下り坂では、車いすの私にとって、とても気持ちがよかったです。

排水溝の溝に車いすの前輪などがはまらないように、板を当ててあるなど、とても親切に心配りがされていました。

結果は1時間と申告して、45分20秒だったのですが、何とか完走できたということで、大変嬉しかったです。これからも、こういう障害者や健常者が一緒になってできるスポーツまたは、大会がどんどんできればよいと思いました。そして、これを機会にいろんなスポーツにチャレンジしていきたいですね=

皆さんもどんどんスポーツをして、いい汗を流しませんか=

## 障害者でも利用しやすい施設紹介

今回より障害者でも利用しやすい施設を取材してレポートします。

### 能登島水族館

和倉温泉から能登大橋を渡り30分程度走りますと、イルカショー、マリンガールによる魚の餌付けで有名な石川健民海浜公園「能登島水族館」があります。この水族館にも障害者に対するサービスがあります。

入場料：障害者手帳を見せると、1～2級は本人と介護者一人が無料で入場できます。館内はスロープになっており、車いすで移動ができます。ただし、スロープが急なところがありますので、介護者を付けた方が安心です。

トイレは、身障者用トイレが2ヶ所あります。スペースは案外広くとってあります。てすりもついています。緊急用ナースコールもついていますので、転倒した場合などに係員を呼び出すこともできます。

### =情報募集中=

「季刊わたぼうし」を利用して、友だちや仲間を増やしませんか。あなたのサークルの紹介、催し物の情報、文通をしませんか、などの情報をお寄せ下さい。

催し物はできるだけ3ヶ月前ぐらいに知らせていただければ大歓迎=発行は(1.4.7.10月上旬の予定)



## みんなのひろば

### 障害者の代名詞車いす

### 地域住民・民間救急会社社長

障害者の代名詞である車いす。基本的には歩行が不可能であったり、歩行が著しく困難な人たちの移動するためだけに作られていました。が、最近では障害者の症状、体型、使用目的に応じて機能的な車いすを選ぶことができるようになりました。『車いす』は商品にするまでに、いくつかの種別によって構成されます。

障害者の移動能力を代替する機能、長時間にわたる座位姿勢を適切に保持する機能の2つの機能、ホターメイト（特注品）、レディーメイト（標準規格品）の2分類。駆動方法、構造、用途の3種類。その2機能2分類3種類を念頭に置きながら、現在どのような車いすが我が国に使用されているか、新たに開発されつつある車いすを紹介します。

まず、一般的に広い用途で使用されている後輪駆動式。前輪が駆動輪になっている前輪駆動式。主に片麻痺患者が対象と考えられた片手だけで操作できる片手駆動式。今でもごく少数の愛好者がいる手動チェーン式三輪車。

各種スポーツ用、スキー用、最大斜度35度をこなす登山用。介護者が後方からいろいろ操作できる介助用。乗車のままシャワーを浴びることのできる車いす。座席が上下する車いす。2段変速ギア付き車いす。乗ったまま立ち上がることのできる車いす。階段を上る電動車いす。パワーステアリング装置のついた電動車いす。車いすを乗せて階段を昇降する電動台車。座位の保持が困難な重度の脳性小児麻痺児などを対象に開発されたマトリックスシート等。多角度多目的によって研究、開発されています。

また、車いすについては、補装具などと同じように各種の公的支給制度があります。年金基金から厚生年金保険法、農林漁業団体職員組合法、労災基金から労災補償保険法、公務員災害補償保険法、社会福祉基金から戦傷病者特別援護法、身体障害者法、児童福祉法があります。

特殊なものとして、船員保険法でも給付されています。この各法律で支給を受けようとする者は、複雑な手続きが必要であるため、病院、福祉事務所等の相談員、福祉司などに相談された方がよいでしょう。

また、付属部品では、シリコン系マット、後方転倒防止装置、車いす用手袋、灰皿等いろいろございますので、そんなことも含めて相談されるのも方法かと思います。

最後に、取り急ぎ紹介させていただきましたが、数々の不明瞭な文章をお許し下さい。また、「季刊わたぼうし」の編集者と愛読者の皆様方の今後益々のご活躍をお祈りいたします。

## 私たちの命はそんなに安いのか？

## 地域住民・肢体障害

この間マスコミなどで障害者の「命の値段」賭して学校での事故死や知恵遅れの子が身体障害者になったら賠償責任を問う裁判が行われました。

神奈川県で水泳の授業中に亡くなったケースをマスコミが取材し、その中で教育委員会がその子の損害賠償に対して18才から65才ぐらいまで働いたとして、120万円として割り出して、それを裁判所が認めたのです。

また、知恵遅れの子が学校でけがをして身体障害者にもなってしまいました。損害賠償は0円でした。いずれも理由は、卒業しても一般の企業に就職できないからということです。また、120万円という障害者一生割り出した理由として一般企業の就職は無理だから作業所しかないとの判断を教育委員会がしました。

情けないのは、人を育てる教育の場が障害者の将来について、なんら可能性すらぬぐいすてて、将来を「もうこんなものなんだ」ときめつけ、可能性を否定するような見解は許すことができません。

兵庫の障害者の高校受験の問題で能力主義は賛成しませんが、能力があろうとその可能性を教育の現場や教育委員が閉ざしてしまう要因の中に、「どうせ、学校を卒業しても就職できないのですから、落としてしまえ。養護学校へ行かせろ」という話があったと聞きます。

つまり、養護学校というものがその役割を果たしているともいえます。世間的に養護学校は障害を持っている子が障害を克服しながら学べる学校となっていますが、こうした事故や事件が起きる中でトップに立つ役人が何を考えているのか、障害者の教育がどう位置づけられているのかがよくわかります。

このことから考えますと、私が交通事故で引かれて亡くなったとすれば私が作業所で働いて稼ぐ金額が65才までの計算をすれば、312万円になります。一般サラリーマンが年収350万円(一生で1億5千万円)で計算されるということなので、私の場合はそのサラリーマンの一年分の賠償責任にもなりません。

私が勤めていたときの計算でいきますと、月3万5千円でしたので、65才まで働いたとして40年間勤めたとして1.680万円になります。こんな私が養護学校出るときにはなんの就職先もなかったのです。訓練校に行き、就職しましたので、養護学校では私が仮に事故で死んでいたら賠償金は0円ですね。

お金でけりのつくことではありませんが、あまりにもひどい裁判ですし、障害者に対する教育は、教育委員会そのものがその子の可能性を否定し、閉ざしたところでの教育というものに対して考え直さなければならないと思いますし、そういう意味でアメリカの障害者法が徹底すれば、画期的なものになるでしょう。皆さんはどう思いますか。

主張が違おうとも排除され、差別されることの悔しさや怒りは誰しも同じだと思います。「なりたくてなったんじゃない」と人は言いますが、私はそんな問題ではないと思うのです。現に生きているさまざまな障害を持った人々が、好き好んで作業所なりに来ているのかと言えば、違うと思います。

一般企業への就労が本当に不可能なのかと言えば、バブル崩壊でも明らかなようにお金がそうしたところに使われていたわけですから、決して不可能なことではなかったといえるのではないのでしょうか。

また、こんなひどいことが・・・

## 地域住民・肢体障害

また、こんなことが……。つい先日、こんなことが、富山市にある精神薄弱者の施設から、地域に暮らすためのステップとしてグループホームにする家を借り、町内会に連絡したら、その町内会が断ったという新聞記事がありましたね。本当に、本当に何の権利があって町内会が断るのかと、腹立たしい思いの時に、今度もまた、差別的なことが起きています。本当にひどい＝

以下は"92年4月13日付けの「北日本新聞」夕刊に載っていた記事です。見出しは「身障者を見越し盗みや不審火の連続犯行(茨城)・被害者なのに冷たい声・自立生活への理解訴える」でした。

茨城県新治郡千代田町で、先月独り暮らしの脳性マヒの重度身体障害者、里内竜史さん(37)が連続して盗みや不審火の被害にあった。車いすの生活の上、声を出すのも困難なことを見越した犯行に里内さんの嘆きは深い。事件後さらに追い打ちをかける動きが広まった。「障害者に家を貸すと物騒」という周囲の冷やかな空気だ。「障害者にも社会で自立し生活する権利を認めて欲し」里内さんは不自由な体で懸命に訴えている。

窃盗犯は3月中旬に4度も進入し、目の前で現金や通帳を盗んだ。身の危険を感じ、介護者宅に身を寄せていた同30日には火の気のない留守宅の6畳間でボヤ。里内さんは何よりも火の元には注意してきた。「自炊できる障害者でも揚げ物だけは介護者に頼むべきだよ」と仲間にいってきた。不審火がそんな里内さんの足元をすくった。

「大きな火事になったらどうする」「自分で動けない人は施設に入るなりして立ち退いてほしい」という声が耳に届くようになった。窃盗犯は、里内さん宅にときどき立ち寄っていた男だという。足が少し不自由なその男は、障害年金を受けて暮らす里内さんを「税金泥棒」とののしることもあった。里内さんは「健全中心の社会に疎外され、本来なら社会に向けるべき怒りをより弱い立場の人間にぶつけたのだ」と考えている。

施設の生活は、障害者の隔離にすぎないと里内さんは考え、8年前から独り暮らしを始めた。街へ出ると「バスに乗せて下さい」の言葉と50音図を並べた表を指で示して意志を伝え、居合わせた人に手伝いを頼む。事件にめげず近所との人間関係を作り直そうと、里内さんは障害者の立場を訴えるピラを作っている。「障害者は地域社会の一員として当たり前で暮らすことができないのか」と問い掛けるつもりだ。

障害者の自立生活を目指している全国障害者解放運動連絡会議全国事務局(大阪市)は、「自立生活する脳性麻痺者は全国に数百人以上いるはずだが、こんなケースは聞いたことがない。行政は重大な人権問題として、血の通った対応をすべきだ」と指摘している。

町内会のことも、この地域の人も、みんな障害者を地域から追い出そうとしている。泥棒に入られてボヤを出されている被害者なのに。みんな何考えているのですか。本当に情けない限りです。障害者だから普通の人以上に火の始末には気をつけているものなのに、外見だけで判断しないで下さい。

## 認定手話通訳者

## 地域住民・会社員

最近では手話を学ぶ人が大変増えています。素晴らしいことです。しかし、手話通訳者は非常に少ないのが現実です。このため、手話通訳者には頸肩腕障害という新たな問題が発生しています。

私は現在、石川県認定手話通訳者という肩書きを持っています。専従通訳ではないのももちろん、通訳時間は限定されていて、夜間、休日になっています。最近ではほとんどできない状態です。もちろん、突然の事故や急病等については昼間でも通訳することがあります。手話に関する、健聴者は多岐にわたっています。専従手話通訳者(通訳で生計を立てている)、手話通訳士、私のような登録の手話通訳者、手話サークル会員、手話の研究者、手話コーラスをやる人、手話講習会の受講者、ろう学校……。

どんな立場でも、ろうあ者と交流し手話を覚えることは素晴らしいことです。私自身を振り返ってみるなら手話通訳になりたくて手話を始めたわけでもないし、求めているわけでもありません。ただ、多くのろうあ者と知り合い、通訳をしたり、一緒に遊んだりしているうちに、いつのまにか通訳者と呼ばれる立場になっていました。

登録通訳者としての通訳は非常に緊張します。最近ではほとんどありませんが、医療問題等の通訳は大変です。ろうあ者の命に関することですから極度の緊張があります。昔は、夜にFAXが入り、病院に駆けつけたこともありました。このように医療、仕事等についてはやはり、専門の通訳が必要です。「手話ができる」だけではなく、通訳の技術と知識を持った人が必要です。早く、専任通訳者が増える必要があります。これは、手話サークルとかろうあ協会といった問題ではなく、通訳養成は行政の立場で基本的には考えることです。

## ニューヨークに行って3

## 地域住民・肢体障害

### BCIDデニス・マックウェドさんとの出会い

それから間もなくして、デニス・マックウェドさんが来られた。デニス・マックウェドさんはブルックリンの障害者の自立のためのセンター(BCID=BROOKLYN CENTER FOR INDEPENDENCE OF THE DISABLED INC)の人だ、あいさつをしてからデニス・マックウェドさんは「ホテルの入り口が階段なので、きっとHさんが泊まっておられるのでどこかから入る所がないかと思って建物の回りを回っていた。

それで遅くなった。このホテルは不親切である。ADAとの関係で行くと改善されるべきであるし、Hさんがお金を払ってここまで来ているのだから当然の権利として使いやすようにしなければならない」と言われた。ここのホテルは私が出入りするにもいちいち係の人に言わなければならない。というのも正面の入り口は回転ドアでさらには階段が2～3段あり、横の出入り口を利用しなければならない。しかし、ここのドアは非常ベル付きで出入りする度にベルがなる。さて、デニス・マックウェドさんと話を始めたが、私が

事前に矢野さんに頼んで自己紹介と聞きたいところを英文で送っておいた。

- 1.アメリカの障害者法の(THE AMERICANS WITH DISABILITIES ACT OF 1990 略=ADA)成立に到るまでの過程。
- 2.ADAの成立による社会的影響力がどのように出てきているか。
- 3.アメリカ全土で障害者の教育の選択権がどう認められているか。具体的には養護学校の就学権は親や本人に権限があるのかどうか。
- 4.知恵遅れと言われる人たちの生活について。地域での取り組み。
- 5.働く場について。一般企業などに障害者が雇用されているのか。障害の重いものがどれだけ雇われているのか。
- 6.街の設備、交通機関などがどれだけ整備されているのか。
- 7.差別問題で特に課題になっているものがあれば聞かせてもらいたい。

～次号に続く～

## 編集局より

この「ニューヨークに行って」は、全編が16編の構成で成り立っています。すべてを紹介できませんので、全編を読みたい方は事務局に問い合わせして下さい。

## 本の紹介

### 評論家ごっこ

永 六輔著 講談社 定価1,200円

人間、「ごっこ」で生きると気分は爽快。世間万般に本気で怒ることも結構。しかし、いまや処世のコツは自らいっばしの「評論家」になっちゃうことです。いまからでも遅くありません。

この頃の子供たちが、また戦争ごっこを始めたという。だったらお医者様をやってほしい。自衛隊の軍隊ごっこを考えると、いつ本気になって国民に銃を向けるかわからない。軍隊ごっこというのは、そういう体質のあるものである。

助平の大人たちは沢山いるのだから、お医者様ごっこの指導者にはことかかない。このほうがずっと平和でいいし、これがきっかけでいい医者が育つかも说不定。

～あとがきより～

## 編集後記

今回より字間を少し詰めて読みやすくしてみました。いかがでしょうか。今後もいろいろなワープロの機能を生かして、読みやすい紙面にして行きたいと思っております。

さて、25号に同封しましたアンケートに沢山の貴重なご意見をいただきありがとうございます。皆様が「季刊わたぼうし」の送られてくるのを楽しみにしていられる、というご意見が多いことに感激をしております。

今後も、新しい試みを取り入れ、皆さんに喜ばれる紙面作りに頑張ります。(Z.O)

28号のテーマは健康管理と医療機関